

出地上記



原作：詠人不知 翻譯：藏小路タマ



ハイ、世田谷ネコのタマだよ。

神様の超能力でカナンだけは生き残った。神様だって、ちょっとやる気さえ出せば役に立つ仕事ができるんだ。もちろん旧世界への思い入れはあるだろうけど、もしこうなってなかったら、カナン攻防戦でローマとベンダサンにメタメタにされてたはず。どっちがいいって言えないよね。とにかく歴史は動いた。世界を道連れにして。

カナンは月を指して上昇中。月は巨大な段ボール製で天幕からぶら下がってる。神様と動物たちはそれを間近で見えるはず。誰か落書きでもしたら面白いのに。

全部焼けちゃった地上はどうなるんだろう。「復興の槌音高く」なんて、あり得ないだろうな。カナンの動物たちは、基本的には何の努力もしたくないんだから。地上をどうするかは神様にかかっている。ということは、神様はもう一度世界を作り直すチャンスを手に入れたことにもなる。まあ確かなのは、前と同じにだけはしないだろうってこと。じゃ、人間は絶滅するに任せるの？ 神様一匹には重い決断。誰かマジな相談相手になってやってよ。

なお原典の線文字B文書はモレネ中立地帯のネコペディアで読めます。

んじゃ、どーぞ。

蔵小路タマ

地上の残照

「サルっていうのは気のいい連中だな、いくらでも飲ませてくれる、おかげで地面が持ち上がったなんて、ちっとも知らなかった」

アダムが酔っ払っている間にカナンは月との中間まで来ていた。夜空を覆っていた大火災の照り返しは消え、漆黒の天空に、いつもより明かるい星々がきらめいている。草っ原で大の字になって空を見上げるアダムの隣で、イブはオランウータンの子どもに綾取りを教えていた。

この世が始まったときからネコ型神様を馬鹿にしていた二人だったが、何故か「悔い改めよ」の一言で人生が変わった。脳天に電撃を喰らったような衝撃を受けたのだ。しかも人類全滅の運命からも逃れられた。あれは本物の神様かもしれないな。

オランウータンの子供は自分用のタブレットで地上の様子をちらちら見ていた。イブも気になって、綾取りの合間に覗き見した。どこもかしこも言葉では言い表せないほど破壊されている。大地震と大噴

火と大波が一度に起こり、ローマが「絶対安全」と断言していた原子力発電所からは、今でも不気味な雲が立ち昇っていた。

「あたしたちの努力は何だったんだろうね。いろいろ作って、建物建ててカネ貯めて、やれ誰が偉いの大富豪だの聖人だのって。結局何も残りゃしない」イブが溜息混じりに言った。

「カナンでもう一度やり直すか？」とアダム。

「同じことを？ 冗談じゃない。あたしゃもう御免だよ」

「いくら見ても元に戻らないよ」クロがキジシロに言う。

「ベツレヘムも馬小屋も無くなったなんて、あたしは信じたくない」

神様が地上に設置した六万台以上の監視カメラは、奇跡的に残った一台を除いて、すべて壊れてしまった。その一台は、以前馬小屋を正面から映していたものだ。今はただ、むき出しの岩肌の上で、黒く燃え残った材木だけを映していた。風がほこりを舞い上げるだけで、他に動くものは無い。

「自滅だね」とキジシロ。

「ルンバたちみたいに因果応報って割り切れれば僕らも楽だけど、この結果は厳しいな。プランBくらいがよかった」

「ヨハネ、泣いてたね」

「誰かが書かなくちゃならなかったんだ。だけど、こっちの世界まで完全に壊れるなんて知ってたら、いくら命令されても書かなかったらうな。とうちゃんも罪なことしたなあ」

神様は全動物に服喪を命じるつもりでいた。あまり長く喪中をやってもダレるから、月に到着するまででいいとしようか。

「メツチャ見当違いだと思うよ」マリアが食ってかかった。「喪なら勝手に一匹でやればいいじゃない。他の動物まで巻き込むことないでしょ。そういうのが思想統制の第一歩になるんだから。絶対にダメ。どうしてもやるんなら総理大臣なんか辞任する」

近くで寝ていたアベルはマリアの大声で目が覚めた。

「かあちゃん、たかが喪中にするかどうかで、どう

してそんなに怒るんだよ」

「お前は黙ってな。これは民主主義の根幹に関わる大問題なんだ。さあ、神様、どうする？」

「だつてさあ、俺だけ喪中の札下げてたらヘンだろ。神様駐在所だけ喪中なんて」

「へえー、だからみんなを巻き込むんだ。まあ、あきた。信じらんない。たしかに地上で死んだ動物はかわいそうだよ。気の毒だとアタシは思うよ。だけど、それとこれとは別だからね。カナンはカナン」

「ダメか？」

「当然ノー。全動物服喪っていうのは、全動物に『かわいそうだと思え』って命令することですよ。思うかどうかはそれぞれの勝手。放つといてよ」

「ううん、よくわかんないけどわかった、命令はやるよ。その代わり、俺が勝手に喪に服することを知らせてもいいよね。カナンテレビで。そうすりゃ雀荘からサルが呼びに来なくなる」

「なんだ、これ以上負けるのがイヤだったんだ」

「それもある」

マリアがものすごく不機嫌そうなので、アベルは避難しようと外に出た。すると、マリアもすぐに出

て来た。

「かあちゃん、どうして機嫌悪いんだよ」

「機嫌なんか悪くない。神様がずーっと黙り込んで考えてるから、気の毒になつて喧嘩吹っかけただけ。世界滅亡で一番ダメーシ受けてるのは神様だからね。どうにかしてあげようと思つても、面白い話なんかできる雰囲気じゃないし、アタシが優しいこと言つても、露骨な慰めにしかならないでしょ」

神様が喪に入ったことは、すぐにテレビのニュースで流れた。

ノアの家では家族といっしょにイエスが食事をしてた。食前の祈りは習慣として続いていたが、はたしてどの神様に祈っているのか、感謝しているのか、祈っている本人たちにもわからなかった。

「私らだけ生き残つてしまつて、こんなご馳走を食べているのは、どうも申し訳ない。でも、食べないと働けないからな」ノアは生きていることに罪悪感があるようだ。

イエスがジャガイモを突付きながら答えた。

「ノアさん、僕は居直ることにしました。ええ、人

生で初めて本格的に居直ります。居直るっていうのは、これまでの経緯やその説明なんか無しにして、現状をそのまま肯定することです。どうして生き残ったんだろう、とか、人類の滅亡の原因は、とか、今考えても答えは出ません。いずれ時間が経つて、冷静に見つめ直せるようになったら考えればいい。だから、これまで起きたことは放つておいて、今の状況で何ができるかを探すことにしました。間違っていますか？」

その言葉に、ノアの息子のセム、ハム、ヤペテが同時に頷き、セムが言った。「間違いどころか、これ以上になく正しい選択だ」

末娘のアンナはイエスの横顔を見ながら、「イエスの言うことに間違いないわ」と甘えるように言つた。イエスの頬が紅潮した。

「したがって、カナン軍はさらに軍備を増強し、荒廃した地上の安全を守るべきだと考える。今や軍隊は世界でもカナン軍しか残っていない。世界の警察官たる立場は、我々に課せられた責務であろう」サルの大將、自称三軍最高総司令官が力説した。

「いいけどさあ、何から何を守るの？」ハト派のゴリラが訊いた。

「それは決まってる。外敵からカナンと世界を守るんだ」自称副参謀総長のカワウソが答える。

「外敵って、どこの軍隊？ ローマ軍はなくなったけど」とアルマジロ。

「外敵は外敵だ。どこから何が来るかわからんから最高の軍備が必要なんだ。カナンが滅びてもいいっていうのか？ そうなのか？」総司令官が苛立つ。

「どこにもそんな軍隊なんかいないよ。神様が言うには、星が光ってる天幕の外側には何も無いって。何も無ければ敵もいないでしょ」と、ボノボの父親。「そういう平和なこと言ってるから弱小国に成り下がるんだ。やられたくなければ最高の軍隊を持たねばならん。人間が使ってた機関銃や大砲や、できれば生物化学兵器とか核兵器の開発も視野に入れてだな」

「ちよつと待ちなさい」鳥の総元締め長老オオムがさえぎった。「どんな軍備を持ってたところで、それより強い軍隊が攻めて来たら負ける。たとえば、外宇宙から神様より強い軍隊が来たらどうする？」

一瞬でカナンも世界も消せるような軍隊が」「そりゃ負けるな。勝負にならない」自称副参謀長のカワウソ。

「だろ？ 今のカナンみたいな、オオスズメバチの急降下とサル投石でも勝てる戦争には勝てるし、核兵器まで持っても負けるときは負ける。軍隊っていうのは仮想敵があつてこそ意味がある。わしはオオムを三百年やっているが、それが結論だよ」

「それじゃ、よくわかんないから今のままでいいってしようか」とアルマジロ。

「面倒だから、いつそやめちゃえば？」とウサギ。

動物たちが開いた『カナン国防指針に関する会議』はオオムの意見を、サルの総司令官を除く満場一致で採択して終わった。

サルの総司令官はちよつと不貞腐れたが、すぐに元氣を取り戻して酒を飲み森に帰った。

情報部にはタイガとツンドラが詰めていた。偵察機からの映像はどれも同じで瓦礫と焼け跡しか映っていない。二匹はもうほとんど見ていなかった。それより、カナン各地に設置した放射線計の数字がす

ごく気になる。徐々に下がってはいるが、カナンの端っこでは、まだ一ミリシーベルトもあるのだ。これは『直ちに健康に影響は無い』とは言えない値だ。

カナン中央部のホテル・シオンでは五〜十マイクロシーベルトと、端に比べれば低い。神様が土地の厚さを五百メートルにした効果かもしれない。それでも『直ちに』ではなく『中長期的に』なら、できれば逃げ出したい数値といえる。

「砂漠の端で高いのは、まだ地上からの直撃を受けてるからだよ。フンコロガシとヘビ・トカゲに回避勧告、出す？」タイガが言った。

「もう出した。森の入口まで逃げて来てて、湿気が多くて気持ち悪いって文句言ってる」

「少し辛抱してもらえないかね。次世代のヘビに手足を生やしたくなければ。それよりホテル・シオンで下がってるのはいいいね」

「五百メートルの厚さの土で、放射線ってどのくらい弱まるんだらう。砂漠の端に比べたら百分の一以下だけど、減衰率は指数変化だよ。よくわかんないんだ」ツンドラはどこで勉強したんだらう。

「いいじゃない、弱くなってるんだから」タイガは

あまり面倒な話にはしたくないらしい。

「違うんだ。放射線源がカナンにあつたらまずいって思ってる。わかる？」

「いや、まるで」

「あのね、カナンがまだ離陸する前に、放射線を出す危ない塵が何かが降って来てそこらに積もってたら、今もそれを乗せたまま飛んでることになるでしょ。まずいと思わない？」

「なるほど、それはとつてもまずいね」今度は少しはわかった。体のどこかにウンチ付けて歩いてたら、どこに逃げても臭いのは消えないもんな。

アラファト山の麓ではクマの親子が空を見上げていた。

「おかあちゃん、スーパームーンだ」

「そうだね、こんなに大きいお月様は初めて見たよ」

「お月様って、なんでできてるの？」

「さあ、なんだろう。黄色いハチミツかな？ もっと近付けばわかるかもしれない」

「わあーい、なめに行こう」子グマは月に向けて手を伸ばした。

光量と線量

カナンは月附近の予定点に到達した。停止するときに、慣性の法則でいくらか重力が弱まった感覚があっただけで、音も衝撃もなく停止した。

動物たちは、空の半分以上を覆う巨大な月を眺めては「気持ち悪うう」とか「落ちてこないかな」と不安そうだったが、三日もすると大きな月を見慣れて、それが当たり前になっていった。

神様は満足していた。後世でどう評価されるにしても、とにかくカナンは生き延びたのだ。あわや戦乱の修羅場を掻い潜り、滅亡という大カタストロフィを切り抜けたのだから、その指導力は確固たるものであるはずだ。もしかするとイエスと並んで語り継がれる神様になるかもしれない。それに、子どもたちの成長はどうだ。神様は「プランC」の宣言を決断しただけで、その他の雑事は全部子供たちがやってくれた。喪中をやつてもすべてが順調に進んだのはあいつらの功績だと言いつける。ここまですれば俺が引退しても大丈夫だな。引退？ どう

やったらできるの？

動物たちの間では『お月見』が流行した。木の上や野原で、みんな月を見上げて世間話をするのだ。カナンテレビでは、カナン各地から月の映像をリレー中継して、土地の名士が解説を付けた。その一方、神様には月についての苦情が数多く寄せられた。フクロウなど夜間に狩をする動物からは『明るくて仕事にならない』と切実に訴えられた。多くの昼行性の動物ママからは『明るいので子どもがなかなか寝なくて困る。もう少し暗くして』と抗議された。また、月が近くなったためにウサギの絵が詳細に見えるようになり、『こんなヘタな絵、誰が描いた』という犯人探しも始まった。

今はまだ三日目で、これからどんどん満月に近づく。何とかしないとクレームはさらに増える。神様は解決を迫られた。もちろん解決策など思い付かないが。

情報部からは一日に何度も線量の報告が来た。非常に憂慮すべき状況とタイガたちが考えているからだ。神様としては、線量がどれだけになれば安全なのか、皆目見当が付かない。大体、シーベルトに二

種類あるのがわからないし、ベクレルという言い方もあって、そんな業界の符丁で言われても素人の神様にはピンとこないのだ。

「なあ、一ミリシーベルトは何ベクレルになるんだ？」と神様がクロに訊いたことがあった。

クロは目を見開いて驚き、「それは別の概念だから換算できないよ」と言い、なんとか説明しようと考え振りをしていただけで、結局黙って行ってしまった。それ以来、神様は誰かに訊くのが怖くなった。もつと馬鹿にされたらどうしよう。俺はネコっばいんだ。

暗い夜を取り戻すために、神様はテレパシー経由で月担当の天使たちに「もう少し光量を下げてくれないか」と頼んでみたところ、「どうやって？」という頼りない返事が返ってきた。

「あの天使たちはマニュアル通りに働いているだけで、光量の調節なんかできません。昔みたいに灯油を燃して光らせてるならともかく、今じゃプログラムを変えないと無理です」と、テレパシーの説明も頼りにならない。

「何かを燃してるんじゃないや、どうやって光らせてるの？ 光らせなきゃいいだけだろうに。俺が消しに行こうか？」神様も必死になる。

「いや、神様が行つてもねえ。月の光は、今では全部LEDなんですよ。何色か光らせて、波長を合成して黄色っぽくしてます。それに、昔みたいに満ち欠けにしたがつて月自体を交換するのではなくて、月面に埋め込まれたLEDをどれだけ光らせるかで満ち欠けを表現してるんで、そんなに簡単に調整できないんですよ」

「説明なんかいいから。とにかく明るくて困ってるの。俺が解決を求めているのに、ダメな原因を並べてみても意味ないだろ」

「まあ、よくありがちな議論です」

「そういう高みから見下すみたいな目線って気に入らないんだけど。あつ、そうか。LEDっていうことは電気で光ってるんだ。それなら簡単じゃん」

「そうですか？」

「うん、子どもにもわかるよ。全体の電圧を半分にするれば明るさも半分になる。これでどうだ」

「残念ですが無理です。まず一般論として、電圧を

半分になると、たとえば電球だったら、明るさは四分の一になります。どうしてかと言うと、同一負荷に印加される電圧が半分になれば、そこに流れる電流も半分になり、つまり電力である光量は半分の半分、四分の一になるわけです。もし光量を半分にしたければ、電圧を約七割に下げれば良いことになります。あくまでも理論値ですけど」

「うるさいよ。誰が電子工学の講釈しろって言った？それに、俺に中学程度の理科がわからないと思う？」

「はい、思います」

「当たった。電気の理屈はわかんないけどさ、でも月は電球じゃないんだろ」

「だから余計面倒なんですよ。満ち欠けを表現するために毎日の光り方をコントロールしているのはワンプチマイコンです。電圧を半分にすれば、まずマイコンが動きません」

「それでいいじゃん。コンピューターが動かなければLEDは光らない。めでたいな」

「うーんと、そうとばかりは」

「まだダメか？」

「ダメとは言いませんが、設計思想がどうなってい

るかで変わります。フェイルセーフをどう考えているかで」

「また面倒な。なんでフェイルセーフが出てくるの」「つまりですね、システムがダウンしたとき、月だから光ることが第一義だと考えれば、とりあえず全部のLEDをできるだけ光らせます。そうじゃなくて、ダウンなんだから消してしまえと思うなら完全に消灯します。また、もしもエラーの警告を出すのであれば、赤いLEDだけ点滅させたりするかも」

「もういいよ。一晩中赤いライトがチカチカしたら、もっと苦情が来る。つとにもう、デジタル仕掛けにすれば便利になると信じ込んでからイヤだね。可能性が大きくなるっていうのは、それだけリスクも大きくなるんだよ」

「じゃ、月の減光、あきらめますか？」

「あきらめない。政治生命がかつてるから。んーんと、もっと根本的な解決はないのかな」

「さあね、考えといてください」

とは言われても神様は特に考えはしなかった。月の光は毎日明るくなり、神様も夜中に『まぶしいな

あ』と思うようになった。また、ウサギの絵があまりにヘタなので、あんなのを描くのは神様しかない、という声が高まりつつあった。これはピンチだ。タイガの情報部が正式に国会開催を要求してきたのはそんなときだった。また別の面倒ごとかよ、と思いつつ、神様は会議を開いた。形勢が悪そうなら寝てればいいんだ。

まずタイガが発言した。

「この中で誰か、一般的な動物が許容可能な最大年間被爆量を知ってますか？まだ放射線量が高いんです。これが大丈夫な数値かどうか自信がなくて」

誰も答えない。しかたなく神様が訊いた。

「線量、今どのくらいなの？」こういう質問すれば、俺が何も知らないとは思わないだろう。

「はい、ホテル・シオン近辺で一マイクロシーベルト程度です。その他、場所によって違います。境界の砂漠地帯では最大十マイクロくらいです」タイガが答えたが、誰も何も言わない。みんなの顔を見回してからタイガが続けた。

「ということは、年間線量はホテル・シオンだと約九ミリシーベルト、辺境で九十ミリシーベルトにな

ります。が、どんなものでしょうね」

ん？、これだよ、これ。やつぱり二種類あるんだ。同じ場所なのに違う数字。だからわかんないんだよ。神様は勇気を出して訊くことにした。

「ホテル・シオンでは、最初は一マイクロって言ったのに、九ミリに増えるのはどうして？」

全員が神様を見た。まずいこと言ったのだろう。か。「ああ、一マイクロは毎時の線量で、九ミリは年間線量のことです。わかりますか？」クレバスが心配そうに答えてくれた。でも、神様はわかってなさそうなので、「ええと、毎時の線量に二十四と三百六十五をかければ年間線量になります。正確には八千七百六十倍なんですけど、まあ九千倍にします」と付け加えてくれた。

「うん、そういうことだよ。知ってたよ」神様は、なるほどねと思いつつ知らん顔をした。横目でマリヤを見ると、やはり安心した顔をしている。なんだ、マリヤも知らなかったんだ。クロは壁を這うクモを熱心に見ているふりをしている。あいつめ、爆笑したいのをこらえてるんだな。

「そんなことより、この線量で安全かどうかという

ことでして、どうでしょうか？」タイガが話題を最初に戻した。

「あのさあ、人間の知識でも絶対安全な線量なんて最後までわかってなかったはずだよ。原発事故が起きると、そのたびに許容線量がコロナ変わってたと思うけどな。人間って、自分が浴びるならシビアに計算しただろうけど、他の人間が被爆したって責任持たなかったから、それでもよかったんだ。結局、許容線量なんてわからないままだった。だから今でもわかんない。僕たちが知ってるはずないよ」ハナポチはどこかで調べてきたんだろう。

神様の心のどこかで『やったぜ！』の声が聞こえた。そうだ、そうすれば一挙に片付く。

「わかった。それなら俺が決断する。今の線量では危ないと決めよう」

「人間の政治家はいつも安全と決めてたけどな」とハナポチ。

「俺はネコ型だから全動物に責任を持つんだ。だから危険と判断する」

「判断するだけなら総理大臣のアタシにもできる。で、どうするのさ。危険な場所を暮らせて？」マ

リアが突っかった。

神様は厳かに言った。「いいや、引越す」

地獄組天使

「今カナンを動かすのは無理です。天使が集まりません。地上から引き剥がす大仕事で疲れて休暇を取ってるのもあるし。それにちょっとした揉め事もあって」テレパシーが言った。

「休暇？ 天使に休暇なんてあるのか？」

「あのねえ神様、いまだき有給休暇もなければ誰も働きませんよ。保険や家族手当もあります」

「贅沢な。俺なんか休みなく働いてるぞ」

「てっきり休みなく休んでると思ってましたが」

「誤解だよ。見た目より大変なんだ。それより揉め事ってなにさ」

「どうしようかなあ、言っていないのかなあ」

「俺には知っておく義務がある。言いなさい」

「ええとですね、かなり前から天使は二派に分かれてまして、ガブリエル派とルシファー派で、なにかにつけて言い合ってたわけで。つまり、神の命令で仕事をするとき、純粹に無私の心で働くべきだというのがガブリエルで、いや、仕事をする天使にも一

定の裁量を与えられるべきだというのがルシファーでした。それがカナン移動の現場で、とうとう大喧嘩になってしまったんです」

「全然知らなかった。怒鳴り声は聞こえなかった」

「そうでしょうね。地面の下で殴り合ってたから。それでルシファーは『とてもやってらんねえ』と、一派を連れて遠くに行っちゃいました。ちょうど太陽の向こう側に恐ろしい城を建てて、地獄っていう看板を出して根城にします」

「ほう、なかなか骨のある奴もいるんだな。ただの羽の生えたネコだと思ってたけど、見直したよ」

「感心してちゃ困るんですよ。天使の半分以上が付いてっちゃったんですから」

「まあ、いいじゃないの。すべての生き物には好き勝手に生きる権利がある。それじゃあね、カナンを月の裏側に動かす仕事はルシファーに頼もう。ガブリエル派より天使が多いんだろ？」

「うへえ、相手は地獄の住人ですよ。その名の通りヘルスエンジェル。ちよつとやりにくいなあ」

「だからさ、こういうことでどうだ？ もし引き受けてくれたら、地獄の存在を俺が公式に認めるって

言ったらどうだ？」

「神様が地獄を認めるんですか？」

「うん、そこにあるものを『ある』って認めるだけ。どこかへんか？」

「ガブリエル派がいい顔しないでしょ？」

「そんなの構わない。この次の仕事は回すって言うだけだよ」

翌日、ルシファーが挨拶に来て、移動工事はすぐに始まった。ルシファーはこれまでの天使と違って、神様の前でも寝転がったり耳を掻いたり、虫やトカゲを追いかけたりするから、正直なところ、神様もそのほうが付き合やすかった。神様も四角四面に堅苦しいのは苦手なのだ。

これまでと違って、天使たちは仕事中でも「水飲みたい」「ちよつと手伝って」などとカナンの動物たちに気楽に声をかけたから、なんだ、天使って中身はネコじゃないか、とみんなが知った。中にはヒョウの親子のように天使と食事をして、近いうちに必ず遊びに行くのと約束をした動物もいた。どうやって地獄に行くのかはわからないが。

カナンは月の真横を迂回して、裏側にすっぽり収まった。これで地上からの放射線を直接受けずに済む。各地の線量は驚くほど下がり、砂漠の端のフンコロガシも安心して帰宅した。

ただ、これは神様自身も初めて知ったことだが、月の造作がいかにいい加減で、それがばれてしまったのだ。月が段ボール一枚でできているのはいとしても、曲がったり反ったりしないように、裏側には補強用の角材がめったやたらと打ち付けてあった。角材だけでは足りず、どこかの廃品置き場で拾ってきたような鉄パイプやアルミサッシ、自転車やベッドも付いていた。

カナンテレビのニュースで、地獄組の天使がこうコメントしている。

「納期がなかったんだろ？ ね。強度設計もバランス設計もしてないよ。天幕から吊るしたら変形したんで、あわてて手直したのがミエミエ。イベント用なら仕方ないけれど、恒久的な構造物では考えられないお粗末さ。いつ天幕から剥がれ落ちても不思議はないなあ」

そうか、マリアに脅されて急いで作ったのが悪

かった。このぶんだと太陽も同じようなもんだろ？

落ちる前に手を打たないといけないけど、まあこれまで大丈夫だったから、これからしばらくは落ちてこないと思う、と神様は知らん顔をすることに決めた。見ぬもの清しだ。

雲ザルは『ダーティーサイドムーン観光ツアー』を始めた。神様に無断のアルバイトで、雲に動物たちを乗せ、一日に何度も工事現場風の月の裏側を案内して回った。

「とうちゃん、ちよつといい？」クレバスが訪ねてきた。

「ああ、月と太陽は当分落ちない。心配しなくていいからね」神様はてっきりその話だと思った。

「そんなの心配してない。天使のことだよ。ガブリエル派とルシファー派に分かれて、なんだか反目してるみたいだけど、カナンとしてはどっちと付き合うの？」

「どっちって言ったって、決めなきゃダメか？」

「ある一定の方針を明確に示さないと、今後において無用な抗争に巻き込まれることも」

「お前、言うこと練習してきたな」

「あはは、わかる？ とにかく何か声明みたいなものを出したほうがいいと思う」

「たとえばどんな？」

「そうだなあ、えっと、一部の天使たちの間で不和が生じたと伝え聞き、非常に遺憾に思い、一日も早い関係修復を心から願っています。カナンは口喧嘩から大戦争に至るまで、すべての紛争の平和的解決に寄与すべく努力を惜しみません。なんていうのはどう？」

「うまいもんだな。だけど、どっちにも付かないよ、って言うてないじゃない」

「それを言っちゃあ、今の分裂状態を認めることになるでしょ。だからこれでいいの」

「そうか、それならそれを出しといておくれ。俺の名前で。それから今後、クレバスは外務大臣だ」

反元素作戦

まだ地上を映し続けるワシ型偵察機の映像を見ながら、神様は迷っていた。カナンをこのまま月の裏側に止めたままにしておこうか、地上に戻そうか。地上にはカナンが抜けた大きな穴がそのまま残っている。誰も埋め立てなんかしないだろうから、帰る気になればいつでも帰れる。問題は放射線だけだ。あの汚物排出機と化した原発を全部潰して、始末に困る放射性廃棄物をなんとかして消さなければ。それができなきゃ、未来永劫、ずっとここにいない。

大体人間は無責任すぎる。自分たちでカタをつけられないものにまで手を出して、俺が作った世界を壊すだけ壊した挙句、ものの見事に自滅してくれた。俺に尻拭いまでさせるつもりだったのか。動物の中で一番甘ったれてるのは人間だな。イエスやノア一族を見ていると、そう悪い奴らには見えない。人間ていうのは、小人数なら良くても、束になると節操をなくす性質なんだろうかと。と、荒涼とした地上を

眺めながら神様は思った。

一方、カナンの動物たちは、永久にここにいうが地上に戻ろうが、どっちだっていいのだろう。以前とまったく変わらず、不自由なく暮らしている。ごく少数、何故かホームシックにかかって『地上に帰りたい』と泣いている子ザルがいるそうだが、今度会って話を聞いてみよう。

もしも将来、動物の数が増えるようなことがあればカナンを広げなければならぬ。するとまた地上からの放射線を浴びる辺境ができてしまう。やっぱり地上を掃除するしかないな。ここに留まるにせよ、地上をきれいにしておくに越したことはない。でも、どうやって？ ハタキでもかければいんだろうか。

「おおい、神様のハタキを作ってほしいんだが」とテレパシーを呼んだ。

「なんですか、それ？」

「あのな、巨大なハタキだ。先っぽに化学雑巾と中性洗剤や蠅取紙みたいなのを付けといて、どんなに汚いゴミでも一挙に取れるやつ」

「意味わかりませんが」

「鈍いやつだな。地上を掃除したいんだよ。放射性

廃棄物を取っちまいたいんだ」

「あのお、お言葉ですが、化学雑巾と蠅取紙くらいでは除染は無理かと」

「神に不可能はない」

「いえ、あります。まあ百万年くらいかけて掃除すれば、放射性物質のほうに根負けして線量はぐんと下がりますけど」

「百万年！ 冗談だろ？ 動物が生きてると思うか？」

「五分五分ですね。ゴキブリは大丈夫でしょう」

「そうか、ゴキブリだけか。地上の掃除ってそんなに面倒なの？」

「はい、プロメテウスがパンドラの函を開けて百八つの煩惱が飛び出したくらい面倒です」

「それじゃあ、あきらめるしかないな」

「いいえ、神に不可能はありません」

「ついさっき、あるって言ったじゃん」

「ハタキじゃ無理ってことですよ。人間にはできないことですけど、神様なら使える手があるんです。反トリトン元素中和法といって、地上くらいの広さなら、まあ三日もあればきれいになります」

「うわっ、やっぱり隠し技があるじゃない。どうい

う仕掛けでやるの？」

「説明しますか？ 少し難しいですよ」

「大丈夫だ。神にわからんことはない」

「怪しいけど、ま、いいや。ええと、元素ってわかりますよね？ 放射線を出すのは一般に放射性元素なんているんですが、それを一個ずつ消します。どうやるかって言うと、原子を作っている陽子、中性子、電子に対して、まったく同じ数の逆位相のトリトン性を持った陽子、中性子、電子をぶつけるわけで、そうすればその原子は中和されて無くなります。原子一個ずつしらみつぶしに消します。専用のシステムがあって、放射性の原子を検出して種類を特定し、反トリトン量子を用意してピンポイントでぶつけるっていう作業が全自動でできます。難点は、ごくたまに量子の数が同じでなくなることがあるだけです。そのときには、ちよつとした衝撃波が出ますけど、ちゃんと養生するので大丈夫です。わかりました？ 今はトリトンで説明しましたがDブレーションの方向でも表わせますが？」

「ああ、全部わかった。わからない部分を除いて全部わかった。それ、やってよ」

「はい、すぐに用意しましょう。専門の部隊が銀河連合にいるので、呼ぶのに二日程度かかります」

「いつもの天使じゃだめなの？」

「できれば慣れた天使のほうが安全です。間違っていると空の天幕まで吹っ飛ぶ大爆発になりますから」

結局、表世界に三日、裏世界に三日の、合計六日かける予定で、地上の大掃除をするようになった。

まず神様は、ワシ型をはじめとする全偵察機に、できるだけ上空に退避するよう命令した。次に、手の空いている動物全員に言って、ポップコーン大会を開いてもらうことにした。銀河連合の部隊長から、量子の数がわずかに違ったときにはポップコーンがはぜるような音がすると聞いたからだ。カナンで絶え間なくポンポンパチパチやっていたら、それに紛れて地上からの音は気にならない。

肉食獣にはバターたっぷりのポップコーン、草食獣にはオリブオイルのポップコーン、それぞれ甘いのと塩味を用意すると決めた。

これほど巨大なフライパンのフタは見たことがない。なにしろ地上をすっぽり覆っているのだから。

ぬるま湯と日和見

あんな猛火に焼かれたんだから、地上にはバクテリアと古細菌しか残らないだろうと思っていたのに、すぐに植物が地表を覆い始めた。俺があいつらを丈夫に作ったからだ。感謝されてもいいな。

帰ればカナンの動物たちがもつと広い野原で暮らせる。正直言つて今のカナンは少々手狭だ。帰ろうかなあ、どうしようかなあ。でも帰ればまた人間が増えて、同じことの繰り返しになるかもしれない。

「なあイエス君、どっちがいいと思う？」隣で般若心経を読んでいたイエスに神様が訊いた。

「帰りましょう」イエスは一言で答えた。「ただし条件があります」

「どんな？」

「もし人間も帰すなら、これからは放任主義ではないけません。神様が性善説に立っているのはわかりますが、僕の中にも悪魔的な部分があります。人間のサガですよ。それが表出しないようなシステムを構築しない限り、また破滅の道へ突っ走ることになる

真ん中の取っ手の部分からは長いホースが延び、天幕を越えて外宇宙まで達している。これでエーテルを吸い取って、反なんとかの物質の材料にするらしい。詳しい説明を聞いても、神様にはまるでわからなかった。なんでも、エーテルというかダークマターに含まれるわずかな粒子を、圧縮して思い切りぶつけると反なんとか量子ができるのだそうだ。

銀河連合の特殊部隊は手馴れた様子で地上の掃除を続けた。心配していた数違いの音は、ごくたまに聞こえるだけで、それよりポップコーンのはぜる音がカナン中に大きく響き渡っていた。

予定の六日が経ったとき、どの動物も今後一年くらいはポップコーンを見るのさえイヤになるほど食い飽きた。特殊部隊はフライパンのフタを畳み、隊長が挨拶に来て言った。「表も裏も全部きれいにしました。天然に存在する程度の放射線源は残してあります。ついでに空中のゴミも取って、空気もきれいにしました。また呼んでください」

神様は隊長にお礼を言つて、山のように残ったポップコーンをお土産に持たせた。

でしょう。一度だけ言わせてください。今回地上が壊滅した原因の一端は神様にあるんです。人間に動物の倫理を求めた。無理ですよ。動物は『足るを知る』ことを本能で知っていますけれど人間は知りませんし、知りたくもないでしょう。ヘンに知恵があるだけに欲望も多彩です」

「知ってるよ。だけど、最後の知恵は残っていると思ってた。まあ、そう信じたかっただけかもしれないけど。まさか全部ぶち壊すとはなあ」

「その、まさかを考えたくなかったのは神様じゃないですか？統治する気もないし、教え諭すのも面倒。多少のことには目をつぶるつもりが、究極の場面にまで目をつぶった。神様はぬるま湯に漬かってたわけです。それを良いことに人間もぬるま湯の中で好き放題に暴れた」

「もつと介入したり天罰を与えたりすればよかったの？」

「わかりません。僕はどうおだてられても神様と立場を代わりたくないですから、どうすれば正解だったのかなんて、考えようがないです」

「あのね、誤解を怖れずに言えば、俺は今回のこと

はこれでいいとも思うんだ。ひとつの結果でしかないとも思う。だって、世界を破壊させることが悪とは限らないでしょ」

「はい、誤解はしません。善悪二元論から遠く離れればね。でも、それって、怠け者の日和見とも受け取れます。それが悪いかどうかは別として」

「昔、そう、ちょうど人間を作ったとき、ものすごく困った憶えがある。何が良くて何が悪いのか、全然判断できなくて、俺なりに必死に答えを探したけど、やっぱりわかんなかった。わかんないはずだよ、善悪を決めるのは俺だったから」

「それで、決めました？」

「いや。何も」

イエスはフウツと溜息を付いた。イエスだって善悪を明確にはしなかったからだ。「強欲だ」とは言ったが、強欲そのものが悪であるとは言い切っていない。

ただひとつたしかなのは、自分の強欲のために他人を苦しめることだけは絶対に悪だ。しかし二元論的に善と悪を選り分けるには、世の中はあまりに複雑すぎる。たとえば、人々が苦しめられているのに、

それを感じさせない巧妙な構造の社会では、強欲を貪る者も悪ではない、と言えるかもしれない。地上の多くの人々は、自分たちが奴隷であることに気付かないまま死ぬ。

イエスも神様も黙っていた。

翌日、イエスはまた神様を訪れた。

「そうでした、僕は居直ったのでした」

「強盗でもしたの？」

「いや、居直り強盗ではなくてですね、グチグチと過去を考えるより、これからどうするか、今日を明日につなげるには何が最善か、そんなことを主眼に生きたいと思ったわけです。それで、ひとつ提案を持ってきました」

「俺の周りでは珍しく前向きな話だな」

「そうでしょ？ 日和見から脱出するといろいろなアイデアが湧きます」

「俺にはできないことだ」

「まず、次の世界でも動物たちの生活は以前と同じです。だって動物は自然に逆らわずに生きていて、特に大きな問題は起こしませんからね。それで人間

ですが、きちんとした倫理観を刷り込みます。いえ、何かひとつの価値を埋め込むのではなくて、生き物としての基本認識を持ってもらうだけです。僕は、そういう風に生まれた人間たちを『新人類』と呼びたいと思っています」

「なるほどね。名前まで決めてあるんだ。いいけどさ、でもどうやって刷り込んだり認識を持たせたりするの？ 宗教や洗脳はダメだよ」

「もちろんですとも。カルト教団を作るつもりはありません。えっと、あくまで思い付きですが、ゴリラに育て親になつてもらうとか、どうでしょう」

「実の親から引き離すのか」

「そんな残酷なことしません。あくまで思い付きです。それから学校を作って、そこで正しい教育をします、って言うど、多分神様は『正しいってなにさ』と言うでしょうね」

「言うよ、もちろん」

「それもこれから、みんなで相談して、妥当と思われる線を出します。人間全部と、あつ、僕の両親は除いてですが、河南寺の三匹と、このプロジェクトに参加したい全部の動物たちでやります」

「わかった。カナン教育委員会を名乗っていいよ」

「ありがとうございます。それから、河南寺のカインとアベルが、地上大破壊の前に、人間が残したあらゆる文献をコピーしていたのをご存知ですか？ クラウドのメモリーに入っていますよ。有用なものもあるはずですし、反面教師として使えるものは数限りなくあるでしょう。それで教科書を作ります」

「偏向した教科書は却下だからね」

「偏向か真っ直ぐかは当事者にはわかりませんが、とにかくカナンの動物の総意で作ります」

「わかった。で、その学校には人間しか入れないの？」

「いいえ、誰でも年齢に関係なく入れます。ただし、人間には義務です。不公平かもしれませんが、旧社会を壊した実績がありますから」

「俺も入ろうかな」

「ぜひどうぞ。関数の初歩からお教えます」

「やっぱやめたわ」

神の帰還

ガブリエル派の天使たちは以前と同じように黙々と仕事をした。カナンを月の裏側から引き出し、地上に下ろし始めた。ガラクタだらけの裏側が見えなくなるのは淋しいと、動物たちはサル雲に乗ってぎりぎりまで近付き、記念写真を何枚も撮った。

神様はオカメインコを相談相手に、地上に帰ってからのことを考えていた。オカメインコは先が読めることで有名な鳥だが、実際に話してみるとそれほどでもなかった。「みんなはオイラのことを岡目八目って言うけど、それは高いところに上ったときのことだ」と言い訳し、次のように続けた。「それより蓮を食ったら先を見通せますよ」

それでもオカメインコは良い提案をしてくれた。北の川を元の幅に戻すのだ。そうすれば鳥も渡りやすい。泳げる動物にも便利だ。「じゃ、泳げない連中は？」と訊くと、「橋を架ければいいじゃない」と、神様には思い付かない妙案を出してくれた。

よし、それは実行しよう。多分一番手間がかかる

宝をかき集めたっていうじゃないか。地下の宝物倉に入りきらないくらいだつてよ」

「それ掘り出してどうするんだい」

「あたりきよ。全部いただく。それからエルサレムへも回って、神殿も探ってみようぜ。あいつらも溜め込んでるに違えねえ。お前にも分けてやらあ。金銀プラチナ、ダイヤにルビー、シバの女王やクレオパトラにも負けねえコレクターになるぜ」

「だからお前さんは治ってないんだよ。神様から悔い改めるように言われたろ？ 財宝なんか集めてどうする気さ。大金持ちになるのかい？ 言っとくがね、この新しい世界じゃ金銀なんかただの光る石さ。重くて扱いに困るくらいのもんだ。欲しがるのはカラスか子ザルだけだろうよ。ダイヤにルビー？ まあ、オハジキには使えるね。キラキラすれば子ネコが喜ぶ」

「うるせえやい。そんなこたあ百も承知、千もガツテンだい。金持ちだと？ 罰当たりめ。そんな恥知らずなもんになる気はさらさらねえよ。おれは集めて手元に置いときたいだけだ。いわゆるコレクションてえやつ。キラキラしたらきれえだろ？ 持って

のはイエスが言つてた教育システムだろう。でも待てよ。人間の子どもなんかないじゃないの。

「もう一回作れば？」これもオカメインコの提案だった。そうか、創世記みたいに人間を作つてやればいいんだ。ついでに、旧世界で絶滅したリヨコウバトとか剣歯虎、ピンタゾウガメなんかも復活させよう。

地上への帰還にそれほど乗り気でなかった神様だったが、動物が増えると思うと段々楽しくなってきた。よし、楽園の再建だ。美しい地上を作り直して、前みたいに草っ原で昼寝するぞ。

カナンはゆっくりと降下し、元の穴に寸分違わず収まった。多くの動物がカナンの外周に集まっていた、着地の瞬間、「わあい帰ってきた！」「元に戻った！」と大騒ぎをした。神様はこの日を祝つて、カナンの『復活祭』と定めた。

「おいイブ、ローマの廃墟に行つてみねえか。法王庁があつた場所で穴掘るんだ」

「レンガくらいしか出てこないよ」

「あつ、知らねえんだな。ペテロの野郎、法王に成り上がったのをいいことに、世界のあちこちから財

て悪いか」

「悪くなんかないけどさ、もし子ガラスが『その赤い石ちようだい』って言つたらやるのかい？」

「小さいのならな。大きいのはやらねえよ。掘りに行つた手間がかかつてるから」

そしてアダムは、丈夫なクワと大きな熊手を作り始めた。

イエスは、アダムとイブから本当の話を聞いた。全部ではない。街道筋、ジャリパンの一件は永遠の秘密だ。イエスは自分が神の子ではなく、神の孫であることを知った。神様に作られた両親から生まれたんだから、完全に正当な神の孫といえる。イエスは長年抱えていたモヤモヤが消え、世界が一段と明るくなったように感じた。

しかし、血筋ほどアテにならないものもないことは知っていたから、今後一層精進し、全動物のために良いことをしようと誓った。その第一弾が教育システムの構築だ。ノアと相談し、ネットで教育委員会創設準備委員会のメンバーを募集したところ、応募してきたのは河南寺の三匹とゴリラだけで、動物

たちの関心の低さがあらわになった。まあ仕方ない。動物はみんな能天気なのだ。神様のぬるま湯政策のおかげで、危機意識を持つチャンスなどなかったのだから。イエスは牛のチャリリーと犬のダニエルにも声をかけ、準備委員会を旗揚げした。

神様はすぐに川の幅を以前と同じに戻した。向こう岸が見えるようになったので、ワニとカバは日帰り旅行を楽しんだ。南の海岸も、海が遠くまで続いている昔に戻ったため、魚やクジラは遠出できるようになった。海の中のエサはまだ少ないらしいが、クジラたちは全速で泳ぐのを楽しんだ。

川に架ける橋は難問だった。浮き橋なら簡単に作れる。でも、いづれ船が通るようになるだろう。やっぱり木か石の橋じゃないとなあ。そんな土木工事、できる動物がいるだろうか。

バクがやって来て名案を伝えた。虹を固定したらどうだろう、というのだ。もしも邪魔になつたら消してしまえばいいし、架け替えも簡単だ。神様は早速虹を出して動かないように固め、レインボーブリッジと名付けた。

すか。いいえ、絶対にイヤです。神様なんて冗談じゃない」

「あはは、本音だね。はたから見ればのんびんだったりとやってみたいけど、神様つて結構プレッシャーかかるんだよ。責任があるような気もするし」神様とイエスはしばらく無言でいた。

「あのな、ひとつ提案があるんだが」神様はシッポを舐めながら、気楽な調子で話した。「アダムとイブは初孫を見たいんじゃないかと思って。それで、俺とマリアが媒酌するからアンナと結婚したらどうかって」

イエスは真っ赤になつてうつむいた。神様は相変わらずシッポを舐めながら続けた。

「ちよつと神様の魔法を使つたんだ。気を悪くしてるなら謝るが、アンナがベツレヘムのアンナとそっくりになるように仕組んだんだよ。外見だけじゃなくて性格も、なるべく同じになるようにしてみた。たしかにベツレヘムのアンナとは別人だ。けどなあ、これだけ同じになれば同一人物と思つてもいいんじゃないかと、」

「ええ、気付いていました」イエスが神様をさえぎつ

すぐにしなければならないことは大体済んだ。あとは絶滅動物の復活と追加の人間を作るだけ。神様はホテル・シオンの駐在所を留守にし、一番最初に世界を作った座布団スペースに戻ることにした。こっちのほうが気分がいい。好きなときに寝ていられる。神様と書いた表札も作り直した。

動物たちもカナンを手狭に感じていたのだろう、毎日のように数百匹ずつ川を渡つて新世界に旅立つて行つた。カナンの動物は減り始め、まるで世界を作ったときのような雰囲気になった。これで政治活動は一件落着だな、と神様は思った。

「なあイエス君、俺はもう引退してもいいような気がする」

委員会活動の報告に來たイエスに神様が言った。「そんなのダメです。神様あつての世界です。神の無い世界なんて、僕には恐ろしくて想像すらできません」

「そうかなあ。じゃ、君が二代目神様になるとか」

「僕はあくまで孫です。大体、世襲制の神様なんて、世襲制の社会主義リーダーより胡散臭いではないで

て言った。「どうも似すぎてる。偶然ではないとは思つてました。そして、神の御業に違いないと感謝していました。ありがとうございます」

「いや、たいした手間じゃないからな。結婚するかどうかは当人どうしの気持ち次第だから、とやかくは言わないよ。でも俺としても初ひ孫を見たい気持ちはある。小さな手をそうつと舐めたら、どんなに気持ちがいいかと思つてさ」

翌日、イエスとアンナの婚約が発表された。一番喜んだのはアダムとイブで、彼らは発掘旅行を無期延期にしてしまった。

神様は草原の真ん中で一日中眠っていることが多くなつた。暇なのだ。明け方と夕方に近くを見回るだけで、あとはぼろ寝ている。こんなラクチンな生活は何年ぶりだろう。

「とうちゃん、いいかい？」ハナポチとクロが訪ねてきた。

「ああ、いい天気だな」

「ウサギのオヤジの餅を持つて來た。かあちゃんが、どうせロクなもん食つてないだろうからって。ヘン

なもん食って腹でも壊されたら困るってさ」

「まだそんなこと言ってるのか。いいか、忘れたようだから言うけど、俺は神様だよ。何も食わなくても千年は大丈夫だ」

「まるで海のダンゴムシだな」ハナポチが笑う。

「ダンゴムシでも拾い食いしてるだろう」とクロ。

「うるさいよ。早く寄越せ。ウサギの餅はうまいんだ」

「やっぱ食うんじゃないの」

神様は寝転がったまま、クチャクチャと餅を食った。

「それで？餅を持って来ただけ？」

「いや、餅は手土産で、再生する動物のリストと人間の人数がわかったんで言いに来たんだよ。これ見てください。」クロは神様にタブレットを手渡した。「すぐく見やすいでしょ。新世界で行こうファイナルエヴォリューション・ハイパーシミュレーター・マークセブンだよ」

「その呪文は何だ？」

「ソフトの名前だけど、そんなのより画面表示を見てよ。面倒な数式は要らないんだ。どの動物をどれだけ増やすと、十年ステップから百年ステップで結

果を見せてくれる。3Dだからリアルだよ。試しに人間をメチャクチャ増やしたら、三百年後に旧世界と同じことが起きたんだ」

「うーん、こんながあると予知能力なんか要らないな。ますます神様は無用の長物になる」どうも最近、神様は下向き志向が強いようだ。

「そんなことはないよ。とうちゃんはまだ世界に必要だ。だって、決めるのは神様だから」ハナポチがフォローする。

「そうなんだよ。シナリオがいくつもあって、どれを選ぶかは神様しだい」とクロ。

「だってさっき、動物リストと人数がわかったって言っただろ」

「けどね、もうひとつ大切な変数があるんだ。それを決めてもらわないと」クロは少しモジモジした。そして説明を始めた。

新世界で行こうファイナルエヴォリューション・ハイパーシミュレーター・マークセブンによると、人間がいる限り、いつかは旧世界同様の破局が来る。どうにも避けられない事実だという。いつ破滅するかは、基本的には人間の数によって決まる。でもこ

れは、今何人の人間を作るかとは、ほとんど関係ない。というのは、人間の数が二倍になるのに三十年かかるのであれば、今作る数を半分にしたところで、破滅まで三十年短くなるだけだから。

そこで、長期的に安定して人間の数を制御する変数が必要になる。ウィルスだ。

どんな致死率のウィルスを、どの程度紛れ込ませるかで新世界の寿命が決まる。

「ちょっと待ってよ」神様は叫んだ。「意図的に人間を殺す計算なんてしたくないよ。お前たちが言っていることは、一人一人の人間の生活を無視してる。幸福を無視してる。人間をただの数字にしてる。まるで保険会社だ。俺は認めないよ」

ハナポチとクロは顔を見合わせた。ほらきた、と思ったのだ。クロは反論しなければならぬ。

「僕たちだって動物が死ぬのは嬉しくない。でもね、とうちゃん、そもそも生物多様性の持続的な維持っていう概念自体、とっても統計的なんだ。ある川でメダカが絶滅すれば大騒ぎだけど、池のメダカが一匹、ネコに食われて死んでも問題にはならない。とうちゃんはずっと、一匹一匹の動物のことを考えて、

それを全部の生き物に広げようとしてた。一匹一匹がなるべく幸せに日々を過ごせるように努力してきた。いわゆる『ぬるま湯政策』だね。でも、だからカナンは無傷で残ったんだ」

「ま、努力はしてないけど、そういうことだ。どうしてそれが新世界全部じゃ通用しないんだよ」

「簡単さ。また人間を作るから。人間の数が数万くらいなら、イエスがリーダーになつて悪いことはさせないと思う。じゃ、数億になったら？数十億になったら？イエスの言うことが誤解なく全員に伝わる？そのときペンダサンみたいなのが出てきても全然不思議じゃない。歴史は繰り返すのさ」

機械工学の本のどこかに書いてあった。システムの脆弱性は、そのシステムの一番弱い部分で決まる。人数が増えれば、人間の馬鹿さ加減は、一番愚かな層で決まることになる。神様は納得するしかなかった。

新世界序章

子どもたちの言うことは正しいと、神様はしぶしぶ認めた。新世界を最大多数の最大幸福で生き永らえさせるには、ある種の意図的な淘汰も必要なのだ。矛盾しているが現実だろう。まったく気乗りしない現実だが。

呪文みたいな名前のソフトで試したところ、一歳から十歳の間男女を合計五十人作るのが最適という結果が出た。致死性ウィルスは数十種類をごく少量ずつ、土の中や他の生き物に住み込ませればいいらしい。こいつらはいつもは休眠状態で、人間が増えると活性化して暴れるのだそうだ。神様はウィルスの具体的な種類や数を見なくなかったので、ソフトが出した最適値をそのまま使うことにした。これで新世界は一万年程度続くことになるという。

イエスは奔走していた。一度に五十人も子どもが来たら、どうやって育てればいいのか。教育委員会創設準備委員会メンバーと相談して、やっと出て来

たアイディアは、五歳以上の子どもを動物に預けて育ててもらおうことだけ。まずゴリラが引き受けると言い、イエスといっしょに仲間内を回って十組の里親を探してくれた。

その話を聞いて手を挙げたのがチンパンジーとオカミ、カンガルー、続いてカナンのはとんどの動物が申し出た。どの動物も人間の子どもを育てたいらしい。イエスは困った。地ネズミが人間を育てられるとは到底思えない。と言って、せっかく善意で申し出てくれたものを断るのは気が引ける。

「神様、助けてください」と駆け込んだ。

「困ったねえ。みんな人間を育てたがつてるの？」

「ええ、多少冗談臭いところがありますが、ゴリラにできるならチンパンジーにも、チンパンジーにできるならメガネザルも、メガネザルにできるならリスザルも、といった調子で、ヘビとトカゲ以外、ほぼ全部が志願しています」

「うーん、応募者多数か。いつそ抽選にしたらどうだろう」

隣の草むらで聞いていたマリアが大声を上げながら入ってきた。

「バカ言うんじゃないよ。団地の入居じゃあるまいし、んじゃこの命ひとつ適当に育ててくさいなって渡すのかい」

「そうは言っても、どうすりゃいいんだよ」

「イエスは純情直球派だから仕方ないとして、神様はネコ型でしょ。少しは考えたらどうよ。たとえば逆転の発想で、里親はやめて保母さん保父さんにしたらどうなの。どこかの空き地に寄宿舎作ってさ、いろんな動物に当番制で来てもらえばいいじゃないの」

「それ、すごくいい。さすがマリアだ」

「マリアさん、あなたはカナンの知恵袋です」イエスもヨイシヨがうまくなった。

結局、河南寺とイエスの庵の間にある広い空き地に、人間の寄宿舎と学校、多目的に使える本堂とグラウンド、白衣を着た天使が担当する診療所等々を作ることに決まった。講堂の名称をぜひとも本堂にしてくれというのは河南寺の三匹の願いで、その代わり掃除は全部するという。マリアは「きつと三日坊主だよ」と信用しなかったが。

人間の給食施設は二ヶ所作ることにした。それ

ぞれガブリエル派と地獄派の天使に任せ、隔日で作らせる。「そうすればどっちが旨いか競争するよ。あまりはもらえないでしょ」というのが犬のダニエルの意見。さすがに人間社会にいただけあって、自由競争の意味を知っていた。

神様は三次元CADで設計図を描き、三日で完成させた。三日もかかったのはCADデータがあちこち間違っていたからだ。「二次元のディスプレイで三次元を妄想するなんて、そもそも無理だよ」が神様の言い分だった。

ホテル・シオンの前庭で、神様は呪文みたいな名前のソフトを起動し、まず復活させる動物を作った。以前のように「全部OK」のフルオートは使わず、一種類ずつ確認してリターンを押した。せめてそのくらいしないと神様の仕事とは言えないと思ったからだ。マリアに言わせれば「いくら成長したね」だそうだ。

次にウィルスの世界中にばら撒き、最後は人間を作った。一人生まれるごとに、神様が頭を撫でて「いい子だね」と言うのを見てイエスは泣いた。神が人

間を祝福している。一人ずつ心をこめて慈しんでいる。神様は人間を見捨ててはいなかった。今生まれた人間たちが作る新世界は、必ずや理想の社会になるだろう。僕も命を懸けてお手伝いしよう。

「なに泣いてんの？ ほらほら、小さい子どもをおんぶして連れてってよ。自分で歩ける子はネコが連れてくから」マリアがイエスを我に返らせた。

そのマリアが喜んだのは、ミリアキャット踊りの三匹が寄宿舎に住み込むと申し出たことだ。専従で子どもたちの面倒を見るという。三交代で小さな子どもたちを見て回り、オムツが濡れていないか、おなかを減らしていないか、具合が悪いところはないか、責任もって仕事をする約束した。

「お前たち、初めて誰かの役に立つことを思い付いたね。偉いよ」神様も褒めてやった。

三匹は全員にミリアキャットダンスを教えるらしい。まあ、その程度のことは許そう、旧世界でだって、人間はダンスをしていた。それもミリアキャットに似た踊りだったから。

夜が更けたころ、神様は仕事を全部終わらせた。

すべて予定通りだ。このまま世界は予定通りに進んで行くだろう。創世記での仕事には、不慣れなこともあつていろいろと手違いがあつたけれど、今度は完璧だ。もしかすると、これで本当の世界ができたのかもしれない。

神様は大きな達成感と安堵感に包まれた。こんな良い気分は味わったことがない。ああ、本当に俺は神様でよかったなあ。神様万歳。



妙にアップビートなテンションで終わった今回、ホントに理想への第一歩なのか、アタシとしては疑いが残るね。だって、今までが今までだからさあ。次のお話で、とんでもないドンデン返しがあつてもおかしくないでしょ。

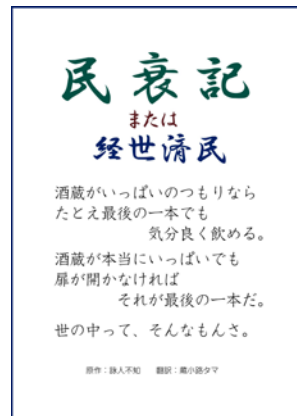
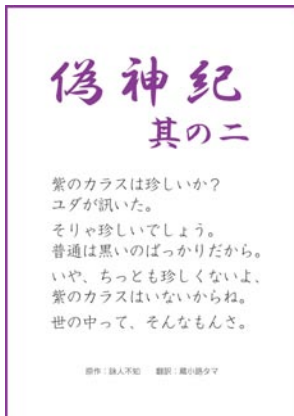
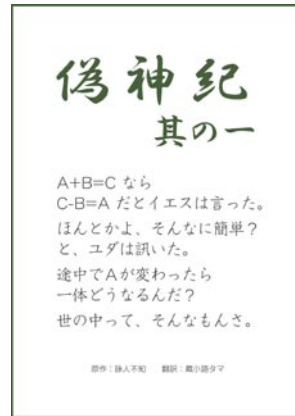
神様としてはこれまでの間違いから学んで世界を作り直せたんだから、まあ楽しいに違いない。人間の横暴を抑えるためにウィルスを仕込むなんて、大局的判断もできるようになった。少しずつ指導者になってるね。でも、これから先もっと学習すれば、ただのつまらない普通の王様になっちゃうのかなあ。カナンは為政者が何もしなかったからパラダイスだったのに。

それでも神様はネコ。政治に面白さは感じないはず。政治より草っ原でごろごろしてるほうが好きだと思つて。いうことは、カナンも世界も平和になつた現在、お話はここでオシマイになつてもいいのでは？ ところが、何故か続きがあるんだ。何が起きるのかな？ まだ翻訳してないからわかんない。

翻訳っていえば、最近ハナポチが優秀な編集者になつてね、アタシの暴走を止めてくれるんだよ。」このセンテンスは元テキストにはないですよ」とか。アタシが勝手に付け足すなんて出来なくなつた。いいじゃないねえ、たつた数行オリジナルを追加したつて。それが翻訳センスつてもんでしよう。

んじゃ、またね。

タマ



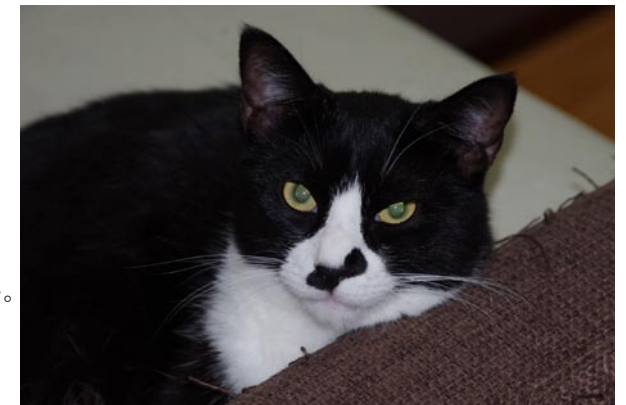
← 表紙がだんだんケバク
なってる

著ネコ近影



アタシが訳してるんだから
少しは付け足してもいいでしょ。

ダメです。
翻訳は原典に忠実でなくちゃ。



出地上記

エチオピア暦 2007 年 2 月 24 日
フツアの西暦では 2014 年 11 月 3 日

著ネコ：蔵小路タマ（イラストも）
仕方なく著作権管理させてる人：大塚 明

いないだろうけど、転載するときは管理人
に言ってね。黙ってやったらヒッカク！